

最期の人権

横須賀市立常葉中学校 三年 加藤 涼太郎

僕の祖父は4年前、肺癌で亡くなりました。祖父は早くに父親を亡くし、4人の妹達の父親代わりとして家族をまとめ、また、親族の相談役としても大変な苦勞をした人でした。苦勞が多かった分、樂觀的に物事を考えず、何に対してもまず悪い状況を考え、そこからちよつとでも良くなる様にと頑張る、とても強い心を持った人でした。

癌が見つかった時、医師は祖父には告知せず、病状と余命を僕の父に話しました。祖父は自分で悪い病気を疑い、また多くの親族の最期を看取ってきたので、自分の病気が何なのか分かっている様でした。祖父は僕の父に「俺がいざという時、延命措置はするな。機械や管を体に付けられて苦しむのは、まっぴらごめんだ」と言ったそうです。病気の進行は早くて、胸の苦しみや肺に酸素が入っていないかなくなる症状が出て来ました。医師は喉を切開して人工呼吸器を付ける提案をしてきました。祖父が一番嫌がっていた事でした。父

は祖母、祖父の妹達や親族と話し合いました。父は「親父の意思なんだから人工呼吸器を付けるのは反対だ」と強く言いました。でも、医師の「これは治療の一環です」という言葉と、親族の何もしないわけにはいかないとの思いに押し切られて、人工呼吸器を付ける事になったのです。

その日から、祖父と父の辛い日々が始まりました。祖父は意識があつたので、機械のせいで声が出ず、口パクで「なぜ付けた。これを外せ、外せ」と言い続けたのです。僕がお見舞に行った時も、僕に向かつて喉の管を指差して手を横に振りました。僕が「嫌なの？」と聞くと、小さくうなずいたのです。僕は何もしてあげられませんでした。父は毎晩のように母に「親父の意思は、望みはどこへ行つてしまったんだ。俺の判断は間違っていたのかも」と後悔の気持ち話を話していたそうです。

一週間程経ち、祖父の身体の酸素量も改善されて呼吸器を外す事が出来たのです。みんなが喜び、祖父の喉も蓋がされて声を出すことが出来るようになりました。祖父もホッとするかと思いきや、口から出た言葉は「家に帰りたい。こんな所にはいたくない。身体の機械を全部外してくれ」だけでした。家族は「もう少しがんばろう

よ」としか言えませんでした。祖父はその言葉に静かに目を閉じるだけでした。

安定した状態が何日か続き安心してた時突然祖父の呼吸が止まったのです。その時、緊急なので仕方ないとは思いますが、医師は家族の許可もなく2度目の呼吸器装着を行ったのです。後でそれを知った父は激怒しましたが、やはり親族の「医者判断に任せる」という気持ちも充分分かるので、祖父に「がんばろうな」と言うのが精一杯でした。意識はなくても無意識に自分で管を外してしまう可能性があると言う理由で、タオルでしたが腕をベッドに縛られて眠る祖父の姿を、僕は見ていることが出来ませんでした。それから数週間後、祖父は息を引き取り、呼吸器のスイッチは切られました。

人は生きていく上で多くの権利を持っています。誰もが差別されることなく、基本的人権で平等に守られています。しかし、なぜ長い人生の最期を自分の望む形で迎える事が難しいのでしょうか。祖父は「延命措置はするな」と望みました。声にならない声で何度も訴えていました。親戚の中には祖父は今まで自由に思い通り生きてきたと言う人もいます。でも父は、「それは違う。おじいちゃんはい頃から家長として、自分の望みを捨てて、家を守ってきた苦勞の

人だったんだ」と言いました。そんな祖父の最期の望みは叶えられませんでした。親の思いも、少しでも回復の可能性があるなら出来る事は何でもしてあげたいという優しさだったんだと思います。正直なところ、僕は何が正しいのか分かりませんでした。ただ、治療という事で乾ききった喉を潤す水も飲ませてもらえず、タオルで腕を縛るのは何か間違っていると思いました。僕は祖父の望みを叶えてあげたかったと、今は思います。あの時期の父の悲しげな顔を思い出すと父も同じ気持ちだったと思います。

人権は生きている間だけ尊重されるべきものじゃないと思います。最期をどのように迎えるのか、そしてそれを託された人はどのような最期の人権を守ってあげられるのか、僕は、それはとても難しいけどじっくり考えなければいけない事だと思っています。

祖父が亡くなる2ヶ月前、「どうしても行く」と言ってきかない祖父を病院に頼んで連れ出して、祖父が大好きだったそばを家族で食べに行きました。あの時のおじいちゃん笑顔は今でもはっきり覚えています。とても嬉しそうで優しい笑顔でした。